

重要文化的景観の選定

《重要文化的景観の新選定》 7件

1 阿蘇の文化的景観 阿蘇北外輪山中央部の草原景観【熊本県阿蘇市】

阿蘇市では、北外輪山及び中央火口丘の北斜面に大規模な草地在り、それぞれ阿蘇谷の平地へ向けて下るにつれて斜面は林地、山裾は居住地、平地は耕作地が広がっている。平安時代の『延喜式』に阿蘇での馬生産を示す「牧」の記述があるように、阿蘇の草地は、千年以上にわたり、牛馬の放牧及び飼料用の草を得る場、耕作地に施す緑肥及びたい肥を供給する場、時には居住地の家屋の屋根及び生活用具の材料を供給する場等として継続的に利用されてきた。

草地環境のみで生き残るヒゴタイ・ヤツシロソウ・ハナシノブ等の大陸系遺存植物が生息するネザサ・ススキ群落、シバ群落の草地在り、全国的にも貴重な生態系が育まれている。

阿蘇神社の西方に位置する霜神社では、少女が火焚殿にこもって焚き木を燃やし続けて霜除けの祈願を行う火焚き神事が継承されており、阿蘇の気候風土と生活又は生業が密接な関係を有してきたことが理解できる。阿蘇神社参道沿いの商店街では、阿蘇谷の豊富な湧水を活用した商店街整備等の自主的な取り組みが継続的に実施されており、景観保全及び地域活性化が図られている。

阿蘇北外輪山中央部の草原景観は阿蘇の文化的景観を構成する要素として重要である。

2 阿蘇の文化的景観 南小国町西部の草原及び森林景観【熊本県阿蘇郡南小国町】

南小国町は小国郷の南半分を占め、東部のくじゅう山系涌蓋山麓から連なる標高400m以上の斜面地に位置する。筑後川源流域にあたるため、北外輪山から流れ出た湯田川、中原川、馬場川、志賀瀬川、満願寺川、田の原川等の中小河川が町域を北流する。谷底の居住地周辺に狭い耕作地が広がり、斜面上は林地、谷が深いため居住地から離れた尾根筋高台に草地在り、大規模な草地は涌蓋山周辺と阿蘇外輪山から延びる台地上に残る。

江戸時代には、井手（水路）の開削、灌漑整備によって畑から水田への転換が行われた。また、筑後川下流の日田から木材の買い付けが行われた地域であり、戦後の拡大造林によって、さらに草地や雑木林からスギ林への転換が進み、林地は小国杉を中心とした林業景観が広がる。中原川沿いには、かつて阿蘇一円から牛馬を伴って畜産農家が参拝に訪れたという馬頭観音を祀る神社が残っており、往時の馬の供養と結び付いた景観を知ることが

できる。田の原川沿いの黒川温泉は、開業してから地域が一体となって、街並みの色彩統一、雑木の植栽、乱立看板等の撤去を実施し、自然景観及び和風旅館を尊重した景観保全による地域づくりを進めていることで著名である。

南小国町西部の草原及び森林景観は、阿蘇の文化的景観を構成する要素として重要である。

3 阿蘇の文化的景観 涌蓋山麓の草原景観 【熊本県阿蘇郡小国町】

小国町は小国郷おぐにごうの北半分を占め、北外輪山北側斜面の標高300m以上の起伏のある斜面地に位置し、筑後川源流の杖立川つえたてがわが北西の日田ひた方向へ流れる。谷底の居住地周辺に狭い耕作地が広がり、斜面上は林地、谷が深いため居住地から離れた尾根筋高台に草地が広がる傾向があり、大規模な草地は町東部の涌蓋山周辺に残る。

筑後川下流の日田から木材の買い付けが行われた地域であり、明治6年（1873）にはさらに多くのスギ・ヒノキを運ぶ必要が生じたため、杖立川の浚渫工事が行われた記録が残っている。現在は小国杉おぐにすぎの植林を中心とした林業景観が広がる。小国杉の起源は江戸時代に遡ると言われており、挿し木で生育する樹種であり、強度及び艶があるため優秀な木材となる。

涌蓋山麓では、九重山を熱源とする温泉が多数存在し、至る所で温泉の蒸気が噴き出しており、黒菜くろなと呼ばれる伝統的な葉物野菜の生産、温泉熱を生かした発電・ハウス栽培・調理等が積極的に行われている。

涌蓋山麓の草原景観は、阿蘇の文化的景観を構成する要素として重要である。

4 阿蘇の文化的景観 産山村の農村景観 【熊本県阿蘇郡産山村】

産山村は、阿蘇山とその北東に位置する九重山の火山帯が複合する地域に位置する。九重山麓では、かつて九州が中国大陸と陸続きであったことを示すヒゴタイ、野焼きによって守られてきたキスミレ等の希少植物を確認することができ、貴重な自然環境及び生態系が育まれている。

山麓やまぶきすいげんの山吹水源から流れる産山川と池山水源いけやますいげんから流れる玉来川たまらいがわが小さな谷を作りながら南東方向に流れるが、その2つの谷あいを中心に産山村が広がり、2つの川は大野川となって別府湾に注ぐ。山吹水源の下流にも傾斜地が多いため、江戸時代に棚田が開かれ、水路及び石橋群が築造された。扇棚田は、山吹水源から南方に約1.3km導水した標高820mの位置に開墾された約3haの棚田であり、現在も16枚の水田が維持されている。

昭和40年代には阿蘇の広大な草地を対象とした大規模草地改良事業と広域農業開発事業により、草地酪農及び肉用牛の低コスト生産のための飼料基盤整備が行われた。現在、阿蘇の草地で放牧されるあか牛は役牛として育成されてきたものを品種改良した種であり、その生産は産山村の代表的な産業となっている。

産山村の農村景観は、阿蘇の文化的景観を構成する要素として重要である。

5 阿蘇の文化的景観 根子岳南麓の草原景観 【熊本県阿蘇郡高森町】

高森町は、中央火口丘の南東に位置し、阿蘇五岳のうち山頂の凹凸が際立つ根子岳がよく見えるため町の象徴となっている。南郷谷では、白川を中心として、兩岸の河岸段丘を棚田及び段々畑、その南北を居住地として、白川の北側集落は中央火口丘、南側集落はカルデラ壁を草地として利用してきた。

中央火口丘では緩斜面に広めの草地及び南郷檜の林地が広がる一方、外輪山では急斜面が多いため小規模な草地が多い。南郷檜は、昭和30年頃に高森町にて育成方法が確認されたヒノキの優良品種である。江戸時代に藩の御用木として植えられ、同様な方法で育てられたヒノキのある神社には、巨木となっているものが認められる。

高森・色見地区は、江戸時代には熊本藩の行政単位であった高森手永の中心地として栄え、現在も熊本市街地から高千穂地方へ通じる交通の要所である。現在、国鉄廃線後は第三セクター南阿蘇鉄道の終点となっており、駅周辺では南郷谷の豊富な湧水を利用した酒蔵等がある商店街が広がっている。

根子岳南麓の草原景観は、阿蘇の文化的景観を構成する要素として重要である。

6 阿蘇の文化的景観 阿蘇山南西部の草原及び森林景観 【熊本県阿蘇郡南阿蘇村】

南阿蘇村は、南郷谷の西4分の3を占め、カルデラ床を中心に広がる。外輪壁斜面は内側に向かって急峻な地形をなし山頂付近はナラ、カシ、ケヤキ、ヤマザクラ等の天然林となっている。南郷谷では、白川水源や塩井社水源等の数多くの湧水がみられる一方、火山灰等の堆積層が厚く乏水性の土壌が広がっている。よって、白川を中心として、兩岸の河岸段丘を棚田及び段々畑、その南北を居住地として、白川の北側集落は中央火口丘、南側集落はカルデラ壁を草地として利用してきた。

江戸時代には、熊本藩から南郷中用水方定役に任ぜられた片山嘉左衛門が、湧水や白川の豊富な水を利用するために、南郷谷の久木野地区に大小の井手（水路）を開削し、その半生を水利事業にささげた。その後も、片山家が四代にわたり南郷の水利事業にかかわ

って計6本の疏水群が開削されており、近代以降も、ほ場整備や用水路整備により畑作から水田への転換が進められた地域である。

南阿蘇村西側(旧長陽村^{ちやうようむら}付近)では、かつて熊本市街地から阿蘇山上への入口として「阿蘇参り」の参拝者が湯治をかねて一週間ほど、自炊・宿泊を行っていた時期があり、当地には地獄温泉、垂玉温泉^{たるたま}と呼ばれる著名な温泉地が広がる。

阿蘇山南西部の草原及び森林景観は、阿蘇の文化的景観を構成する要素として重要である。

7 阿蘇の文化的景観 阿蘇外輪山西部の草原景観【熊本県阿蘇郡西原村】

西原村は、西外輪山の稜線西側及び立野火口瀬^{たてのかこうせ}の南側に広がる。外輪山の稜線上には俵山^{たわらやま}(標高1,095m)、その西には火山活動により形成された大峰火砕丘^{おおみねかさいきゅう}及び高遊原台地があり、鳥子川^{とりこ}、木山川^{きやま}等の小河川が西流する。カルデラ内よりも温暖であるが、「まつぼり風」と呼ぶ冷たい東風が俵山周辺から村域に吹き降ろすため、耕作条件は厳しい。阿蘇の他地域と同様、俵山を含め標高の高い外輪山の斜面は主に草地として利用されてきたほか、台地には居住地と耕作地が広がる。

高遊原台地は、水はけが良く畑作が発達した歴史を持つが、村からは中世の阿蘇神社改築時に合掌材や磨き柱等の良質な木材が提供された記録が残るほか、江戸時代には熊本藩の惣庄屋^{そうしょうや}であった矢野甚兵衛^{やのじんべえ}によって、大切畑^{おおぎりはた}ため池・堤の造成、水田開発等が行われた。大切畑ため池は、昭和期に高さ23mのアースダムとして改修され、水田・畑地、防火用のため池・ダムとして、重要な役割を継続的に果たしてきた。平成28年(2016)の熊本地震では決壊の恐れがあるため、周辺住民に避難勧告が出され、布田川断層^{ふたがわ}が直近を通っていることが確認されたが、地域の歴史風土及び生活の象徴として、早急な復旧が計画されている。

阿蘇外輪山西部の草原景観は、阿蘇の文化的景観を構成する要素として重要である。